金成支援学校便り　第１３号

ほたる

令和７年３月２４日　発行

目指す児童生徒像
- ○ すすんで学び、える子ども
- ○ みんなとなかよくする子ども
- ○ 明るく元気な子ども
- ○ 自分のことは自分でする子ども

～ きっかけ ～

校長　　針生 智之

去る3月7日、多数の御来賓、保護者の皆様の御臨席の下、卒業式を無事に挙行することができました。今年度を振り返ると、新型コロナウイルス感染症の対策として様々な制約を受けていた教育活動が、ようやく活動のねらいを第一義に実施することができるようになり、大きな節目の１年になったのではないかと感じております。今年度の教育活動の一つ一つが、児童生徒にとって将来を切り開く大きなきっかけとなることを願ってやみません。

きっかけと書きましたが、自分自身を振り返ると、自分自身の成長過程のステージそれぞれで、大きな節目となる出会いやきっかけがあったことを感じます。縁あって、宮城県の教員として宮城県の教育に携わる機会をいただいておりますが、その一つのきっかけは作家の灰谷健次郎先生との出会いであったと感じます。

笑い話では、大学入試の際に、根拠もなく今年の二次試験には灰谷健次郎先生の問題が出題される、などと友人に話していたところ、本命の大学の二次試験には、なんと現代文に、先生の「ろくべいまってろよ」が出題されました。そのお陰で良い点が取れたかのかどうかは今となっては知る由もありませんが、これも教育に携わることになるきっかけの小さな一つだったのかもしれません。

話を戻すと、自分の中学時代に、先生のベストセラーの一つである「兎の眼」と出会ったことは、漠然と教師になりたいと思い始めていた当時の自分に対する、大きなきっかけであったと感じます。もちろん中学生である自分には、この本と書かれた時代背景との関連や、奥に潜む本質など分かりようもありませんでしたが、押し付けではなく子供に寄り添い、子供たちと共に学ぶ小谷先生の優しさに大きな衝撃を受けたことを今でも思い出します。今読み返せば、特別支援教育における、共に学ぶという大切な本質の一つを文学として目に見える形で表現し、今に続く特別支援教育の礎となり、微力ながら特別支援教育に関わることになった自分の礎となっていることに、きっかけの持つ意味の大きさを感じます。

子供たちの生きるこれからの時代は、変化が激しく先が見通せない時代とも言われています。学校ではこれからも、子供たちが身に付けるべき力を見極め、工夫しながら教育活動に取り組んでいきます。そして、それらの教育活動が、子供たちが自分の将来を切り開くきっかけとなる出会いとなれるよう全力で取り組んで参ります。皆様におかれましては、引き続き御支援・御協力のほどよろしくお願いいたします。

【令和７年度４月の予定】

８日(火)　披露式・始業式(１１時３０分下校)
　　入学式
９日(水)　運転手さんと乗務員さんを紹介する会
１１日(金)　全体朝会(新・転入生を紹介する会)
１９日(土)　第１回授業参観(１１時３０分下校)
　　ＰＴＡ総会・ＰＴＡ役員会
２１日(月)　振替休業日
２３日(水)　～５／１(木)　教育相談期間

※明日から春休みです。規則正しい生活を心掛け、体調を崩さず元気に過ごしてほしいと思います。